

# 『詳説福島原発・伊方原発年表』

【書評】図書新聞(2018年4月28日号)

クロスカルチャー出版ニュース 二〇一八・四・一九

⑤ 第3349号

学術

## 福島原発震災から七年を経たいま、より多角的に原発問題を捉える

福島原発と伊方原発を比較しながら、時系列的に「読む年表」

三輪智博

澤正宏 編著

### ▶ 詳説福島原発・伊方原発年表

2・28刊 B5判490頁 本体25000円

クロスカルチャー出版



福島原発震災から七年が経過した。いまこの瞬間も続けられている廃炉作業は、依然として困難を極めている。一時連呼された「収束」のめどは立っていない。帰還促進をはかる行政の施策の向こうには、高い放射線量の地域が残ったまま。福島原発事故をよそに、電力会社は各地の原発で再稼働を進めている。使用済み核燃料は溜まる一方である。

問題は山積みが続いている。即効性のある打開策など何も無いといつてよい。問題は子や孫の世代以降の未来にかかっている。にもかかわらず、政府はエネルギーシフトへと舵を切るうともせず、原発推進の姿勢を変えない。

このたびクロスカルチャー出版から『詳説福島原発・伊方原発年表』が刊行された。同出版から既刊の『福島原発設置反対運動裁判資料』(全七巻)と『伊方原発設置反対運動裁判資料』(同)で解説・解題を担った澤正宏福島大学名誉教授が、これらの資料の成果をはじめとして、ためみない資料収集に基づいて本書を編纂した。約五〇〇頁におよぶ大書である。事故から七年を経たいま、より広いパースペクティブで原発問題を捉えるべき時に来ている。福

島原発の源流から今日までを、四国電力伊方原発の歩みと突き合わせながら、とどこができる本書は、その意味でもまことにタイムリーな出版である。

福島原発年表の起点は一九四〇年。日中戦争が激化し、太平洋戦争に突入していく前夜、将来の福島原発の地に陸軍が飛行場を建設した。戦後、東電が買収に動くのは、原子力予算が成立した一九五四年の翌年だ。福島原発は戦争の痕跡を土台にして、戦後日本の原子力政策とともに歩んできたことがわかる。

本書の最大の特徴は先述のとおりに、福島原発と伊方原発を比較しながら時系列をたどることができる点だ。四国電力が伊方原発の立地選定を始めたのは、福島第一原発が着工した翌年の一九六七年。当初予定地としたのは愛媛県西

南部、現在の宇和島市だったが、地元住民の激しい反対運動を前に、建設を断念した。

四国と行政はそれを教訓に、秘密裏に伊方町に設置計画を移した。住民無視の原発推進がここにスタートしたのである。住民自治を脅かきにした国策の進め方は、同じ時期の成田空港建設計画でも明らか

なっておりである。原発は放射能汚染の先に、まず人心を汚染する。カネで住民の自立を切り崩すやり方も、福島と伊方の双方で見られた普遍的なものだった。

(現代史研究)

思想